

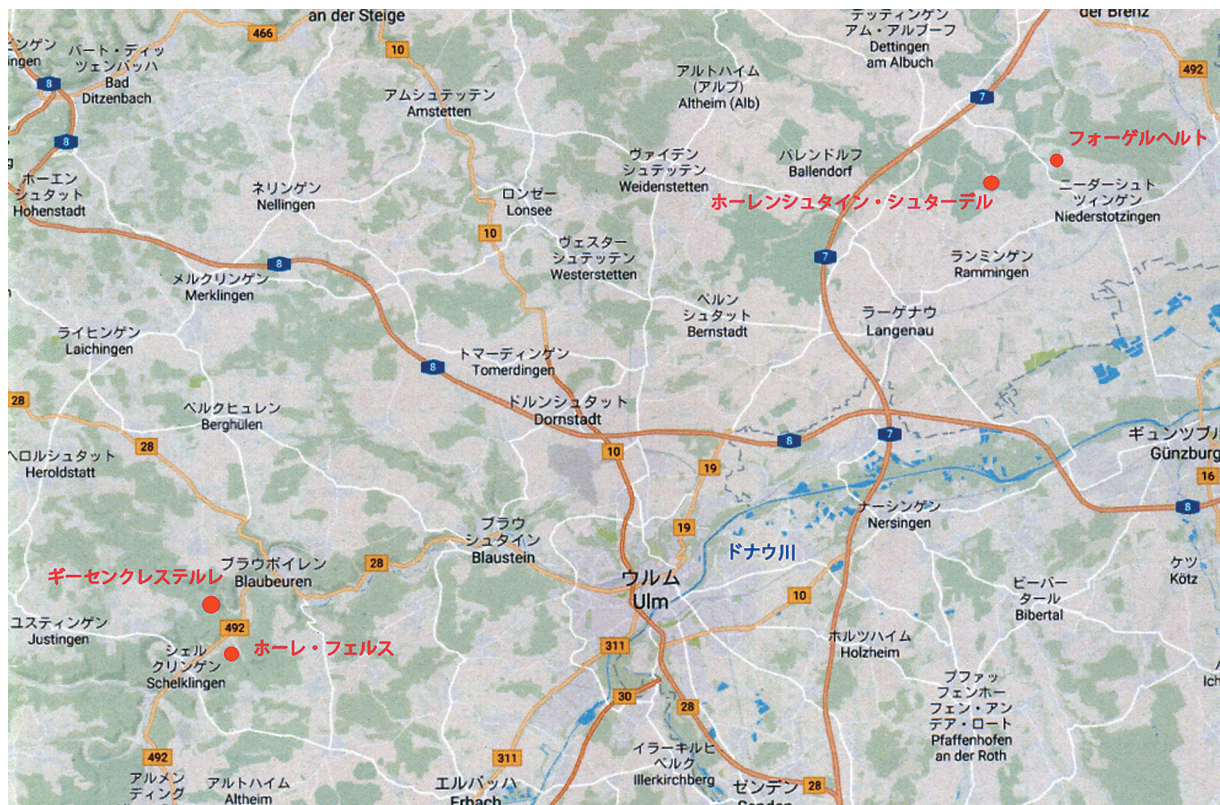
ホーレ・フェルスのヴィーナス： ドイツ・ドナウ川上流域出土の後期旧石器時代の小彫像等について

小川 勝

キーワード：先史美術、シュヴァーベン・ジュラ地域、ヴィーナス像、ホーレ・フェルス洞窟、彫刻と絵画

はじめに

近年、美術の起源に関し、様々な古い年代が報告されているが、その中でも2008年にドナウ川上流域にあたる、ドイツ南西部のシュヴァーベン・ジュラ地域（本稿では、日本語でなじみが深いということで便宜的に「ドナウ川上流域」と称する）のホーレ・フェルス洞窟で発見された小彫像は、極めて重要な作品である。（地図）本論で詳述するとおり、少なくとも約36,000年前と見なされており、現時点で最古の造形表現であると認められる。



地図（Google Map に加筆）

筆者は、長らく美術の起源論的アプローチを標榜して、洞窟壁画などの先史岩面画を研究対象としてきているが、本稿では、立体作品も視野にいれて、議論を展開してゆく。まず、問題の作品を詳しく精査し、さらにこの地域から出土している、同様に古い彫刻作品群を検討し、美術の起源の問題に迫られればと考えている。筆者がこれまで議論の根拠にしてきた作品群は、洞窟壁画などの岩面画という平面的な造形であり、立体作品にはほとんど言及してきていないが、本稿では、最後に、彫像と岩面画の質的な違いについても議論を展開したい。

1 ホーレ・フェルス



図1 ホーレ・フェルスのヴィーナス

図1は高さ5.97cm、象牙を削り出した小さな彫刻であり、報告者のドイツ・チュービンゲン大学のコナードにより「ヴィーナス像」として解釈されている。¹⁾ ドナウ川上流域の主要都市、ウルム市から西方約15km、ブラウボーレン市とシェルクリンゲン市の間に位置するホーレ・フェルス (Hohle Fels) 洞窟で、発掘調査中の2008年9月に発見され、翌年2009年5月に早くも、「ネイチャー」に報告された。(図2) 作品は6個の断片として出土し、復元されてヴィーナス像となった。左肩と左腕だけが見つかっておらず、ほぼ完形といえる。(図3) 発見された堆積層は綿密に調査され、共伴出土物から33件ものAMS年代が検出されており、しかも、複数の研究所に資料を分析させており、その信頼性は高いと評価できるだろう。(図4) 結論として、作品が制作されたのは約36,000年前(紀元前約34,000年)ということになり、2009年の時点で、美術作品として最古の年代を提出したことになった。この、ヨーロッパ西部のオーリニャック期(約43,000年前~26,000年前)に相当する年代は作品から直接的に年代を導き出したものではないが、周辺で発掘された資料を厳密に扱っていて、疑いの余地はなく、ヴィーナス像に関してはこの制作年代を前提に議論を展開しなければならない。

筆者は改修されたブラウボーレン先史博物館に2014年に収蔵、展示された作品をつぶさに観察することができた。全体に茶色っぽく、欠損した部分の内部も同じ色合いであり、これは材料の象牙が経年により変色した現れだろうと思われる。(図5) 後で見るとおり、表面全体に細かな刻んだ後が見いだされ、人々の造形に対するこだわりも見てとれるだろう。全体的には「ヴィーナス」と解釈されているとおり、後代の、主としてグラヴェット期(約29,000年~22,000年前)に制作されたオーストリア出土のヴィレンドルフのヴィーナスなどと同様、性的な特徴が強調されており、とりわけ、乳房は、類例の中でも最も突出した表現になっている。(図6, 7) 両腕も、乳房を支えるように下の部分に刻まれていて、今や時代遅れと批判的な意見もある「様式的」な観点からは、グラヴェット期の制作と考えても、無理はないようである。(図8) 臀部も左右に張るように表現されていて、これもグラヴェット期の作品の特徴である。(図9) 足は膝下の造形が明確ではなく、やはりグラヴェット期のヴィーナスと類似している。下腹部は保存状態がそれほどよくなく、決定的なことはいえないが、女性器の表現が意図されていて、それが背後のお尻の割れ目にまで連続して伸びているのが、他にはない特徴といえるだろう。(図10) さらに、最も変わっているのが最上端の表現で、頭部が全くなく、代わりにリング状のものが刻み込まれている。(図11) コナードは、この穴に紐状のものを通して、ペンダントとして使用していたのではないかと推定しているが、類例がないだけに、まだ断定はできないだろうと、筆者は考えている。²⁾ リングの位置が胴体の中心部ではなく、少し左後ろ半身の方にずれているのも、少々バランスがとれていない印象をかもしている。おそらく、その部分にリング状のものを作成するための小さな突起があったのだろう。いずれにせよ、用途を考えさせるだけでも希有なことであり、作品を中心とした制作者とその周辺の人々の情景が目浮かぶようで、興味深い。

コナードは、遺物の用途に関して推定することに意欲的なようで、同じくホーレ・フェルス洞窟で出土した、3つの穴が開けられている、従来用途が不明で「指揮棒」などと解釈されたこともあった「穴あき棒」を、ロープを編むための道具だったというアイデアを最近発表している。³⁾ (図12) その妥当性の検討は今後の課題だが、使用痕とも思われる部分もあり、可能性がある提案ではあるだろう。ベルギーのリエージュ大学では、レプリカの「穴あき棒」でロープを編み込む実験もしており、一見説得力があるかもしれない



図2 ホーレ・フェルス洞窟



図3 左側面

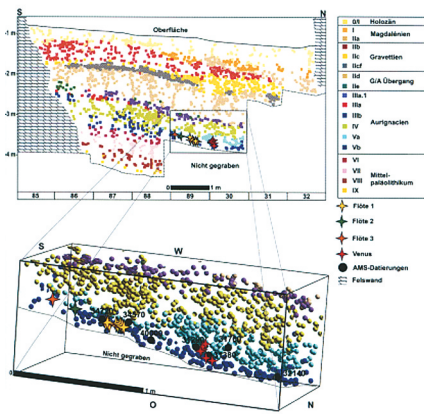


図4 発掘層図



図5 背面



図6 ヴィレンドルフのヴィーナス



図7 右側面

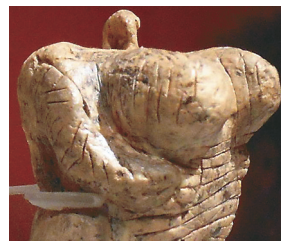


図8 手の部分



図9 下腹部



図10 臀部



図11 上端部



図12 「ロープ編み器」



図13 リエージュ大学によるロープ編みの実験

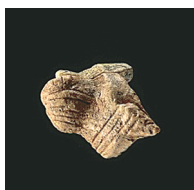


図14 ホーレ・フェルスの別のヴィーナス断片



図15 ホーレ・フェルスの動物像

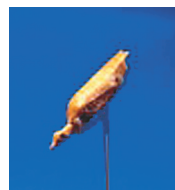


図16 ホーレ・フェルスのトリ

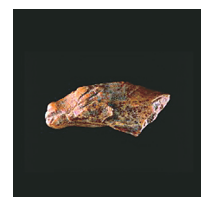


図17 ホーレ・フェルスの動物像

が、可能性の一端を示したにすぎない、と実験考古学に批判的な立場は堅持しておきたい。(図13) さて、コナードが重視している制作の痕跡だが、全高5.97cmという作品のサイズの割には、長くて深い刻線

が表面の多くの部分に施されており、これも、ホーレ・フェルスのヴィーナスの特異なところである。(図8。11など) 報告者は、衣服あるいはかぶり物の表現ではないかとも推定しており、また彩色は当初からなかったのではないかと考えている。⁴⁾筆者としては、作品がある程度できあがった後も、所持していた人物が、折に触れて石器で刻みつけていたのではないかと考えている。その行為の意味は不明だが、所持者の「もの」への何らかの執着心の表れではないかと、筆者は想像しているところである。ここで重要なのは、身近に持っていた作品が常に改変の対象であるのに対し、筆者が長らく研究対象としている洞窟壁画の場合は、制作後、容易には近づけない場所にあったこともあり、あまり見られることもなかったということである。ここに、本稿の結論部分でも議論するが、ほぼ同時代の彫刻と岩面画の、本質的な違いがあるのではないかと、筆者は考えている。なお、ホーレ・フェルスから出土した作品としては、他にも多くのものがあるが、ここでは、画像を紹介するにとどめたい。(図14, 15, 16, 17)

2 ホーレンシュタイン・シュターデル

ドナウ川上流域からはさらに彫刻作品が発見されている。⁵⁾ウルム市からは、ホーレ・フェルス洞窟は逆方向の、北東側約25kmのところにあるホーレンシュタイン (Hohlenstein) 山地のシュターデル (Stadel) 洞窟で1939年に象牙の断片が数多く発見されたが、第2次世界大戦の勃発により、研究は中止され、資料はウルム博物館に死蔵された。(図18) ようやく1969年から復元が試みられ、ついに1975年に頭部の復元が着手され、1982年にはライオンの頭部が現れた。高さ29.6cmの立像が現れ、人間の胴体の上にライオン(ネコ科動物)の頭が乗っていることから「ライオンマン (Löwenmensch)」と呼ばれるようになった。(図19) 1975年の時点で、別の復元案もあり、それにより牝であるという判断から「ライオンレディ (Löwenfrau)」と呼ばれたこともあった。⁶⁾ (図20) 現在では、2009年から再開された発掘により、さらに多くの断片が発見され、それを加えた復元は2013年に完成した。現在ウルム博物館で展示されている作品は、約300もの断片からなっているとのことである。⁷⁾

「ライオンレディ」という復元案もあるとおり、この立体ジグソーでもいうべき復元には、様々な可能性があるが、本稿では、最終的な復元案が妥当なものとして議論を進めるとして、果たして、これは「ライオンマン」と称すべき、半人半獣像なのだろうか、という疑問が残る。(図21) 筆者は、ほとんどの研究者の見解に反して、これは動物像にすぎないと考えている。立っている姿勢の復元は認めるにしても、だからといって、それが人間を表すと判断するのは短絡的すぎるのではないだろうか。この高さ30cm近い作品は、細長い象牙を材料としており、その元の形状に制約を受けているのは確かだろう。作者は、自然の象牙の中に、まずライオンの頭部を見だし、その後胴体部を作り上げていったのではないだろうか。その際、ライオンが四足動物であることを写実的に表現するよりは、胴体部があるということを示すことに意味を見だし、そのままライオンを立像として完成させたのではないだろうか。一般的に、美術作品は、見たものをそのまま、誰もが同じように見えるように再現したものと考えられ、先史美術にも、そのような現在の美術観による見方を適用して、立っていれば人間だろうと、安易に判断する傾向があるだろう。洞窟壁画に関し

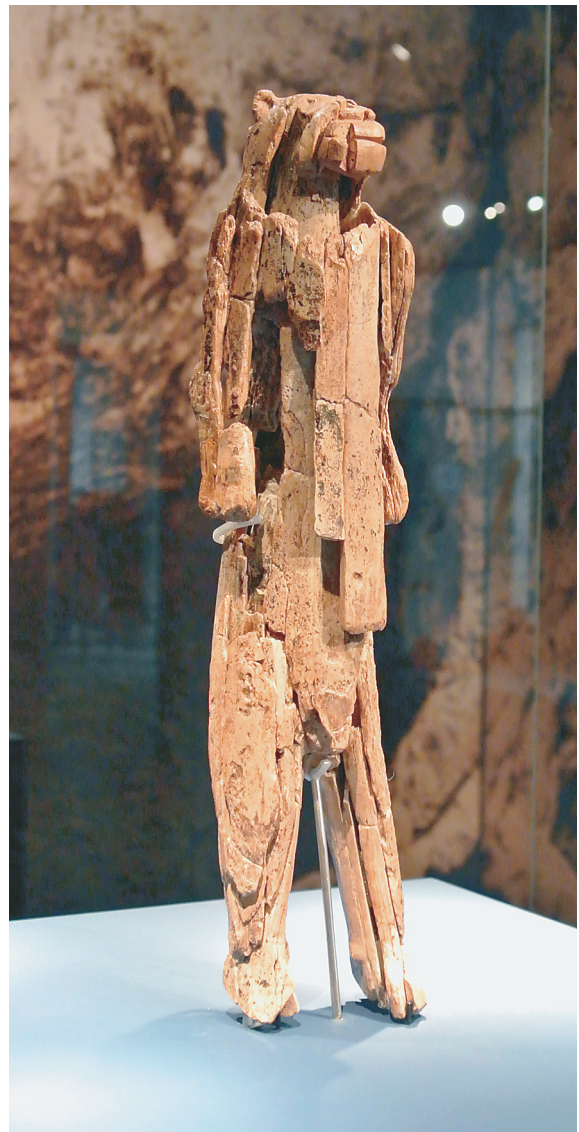


図19 「ライオンマン」



図18 ホーレンシュタイン・シュターデル洞窟

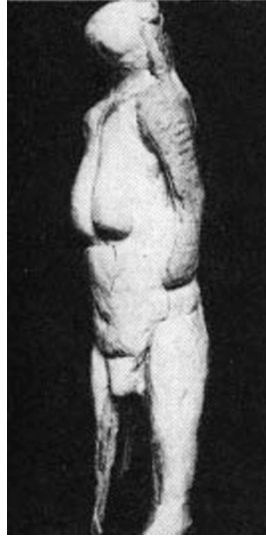


図20 「ライオンレディ」

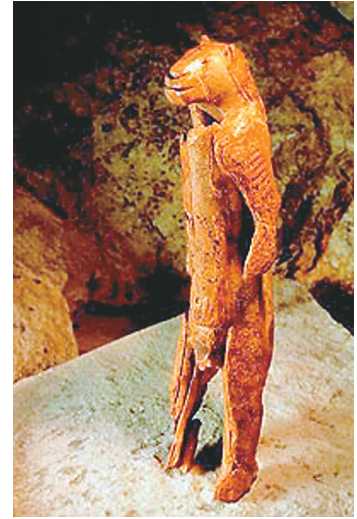


図21 別角度からの「ライオンマン」

でも、立ち位置の姿勢の作品では、半人半獣であるという解釈が横行していて、「呪術師」と称される作品が多くあるが、筆者は、それらはすべて動物像にすぎないと判断している。(図22)

筆者が長らく標榜している「統合論」によれば、作品は、洞窟壁画の場合は、岩面の自然の形状から出発して制作されるのであり、同様に、彫刻の場合は、象牙などの素材が本来有している形状に触発されて、作者たちが日頃、関心を抱いている主題を表現するに至ったのではないだろうか。見たものを見たままに表現する自然主義的な原理で、美術は本来制作されたものではなく、それは、古代ギリシャ以降、そして、それを再生させたヨーロッパのルネサンスとその影響を受けた地域、時代の美術観にすぎないのであり、それを先史美術に適用させるのは、誤った結論に至るのではないだろうか。美術が先史時代以降、ずっと同じ原理で制作されてきたという予断により、例えば、近年喧しい「シャーマニズム説」などが提唱されているが、こころの中で変身しつつある作者本人の自画像であると考え、その素朴な美術観が果たして、実相に沿ったものなのかは、この作品の解釈問題も契機にして、今後精査されなければならないだろう。⁸⁾ (図23)

いずれにせよ、改めて「ライオンマン」に戻ると、その制作年代は出土したとされる層の放射線炭素年代測定法により、約32,000年前と推定されていたが、上記、2009年以降の再発掘により得られた資料から、さらに古い時代である約35,000～40,000年前にまで遡るのではないかと、考えられるに至っている。近年の先史美術の傾向として、より古い制作年代が提出されていて、これもその流れの中に位置づけるものと考えられるが、それが果たして妥当かどうかは、今後の課題であるというのが筆者の見解である。フランス南部のショーヴェ洞窟壁画も、従来は約32,000年前と見なされていたが、ドイツ南部の彫刻群の年代を意識してか、近年では、約36,000年前と公式に述べられていて、この4,000年というのは誤差の範囲ともいえるが、あまり意味のない競争とはいえるだろう。⁹⁾ (図24) 重要なのは美術作品が制作されるに至ったコンテキストであり、どのような人々が、どのような状況の中で、作品を実現させるに至ったかを考えるべきであり、それは、本稿の結論部分で詳しく見てみたい。



図22 レ・トロワ＝フレール洞窟「呪術師」ブルーユによるかき起こし



図23 南アフリカの岩面画「半人半獣像」



図24 ショーヴェ洞窟「相対するサイ」



図25 フォーゲルフェルト洞窟



図26 フォーゲルフェルトのマンモス



図27 フォーゲルヘルトの動物像

3 フォーゲルフェルト

ホーレンシュタイン・シュターデル洞窟からほど近い、フォーゲルヘルト (Vogelherd) 洞窟からは1931年以来10個の象牙製の動物像が発見されており、2003年になって、上記のコナードなどにより、その制作年代が31,000～33,000年前と発表され、それらもオーリニャック期の作例であると認められるようになった。¹⁰⁾ (図25) それぞれの作品は、ウマ、マンモス、ビゾン、ライオンなどを表していると考えられ、サイズは3cm～9cmで、すべて完形で発見されている。(図26, 27) 制作技法は象牙の丸彫であり、ホーレ・フェルスのヴィーナスと同じく、表面に多くの刻線が見いだされる作品もあり、同じく携帯時にランダムに刻まれた可能性もあり、同時に、光沢が現れている例もあり、これらは意図的に磨かれたのではなく、握るなどの行為により、結果的にそうなったのではないだろうか。用途は分からないが、常に身近に置いていた可能性はあるだろう。今のところ、年代が確定していないので、また、本稿で取り上げる他の作品よりは、少し新しい年代しか出ていないので、ここでは、これ以上言及しないでおきたい。なお、発掘現場のフォーゲルフェルトには考古公園が整備されていて、作品が出土したまさにその場所に容易にアクセスすることが可能となっている。

4 ギーセンクレステルレ

上記ホーレ・フェルス洞窟の近くのブラウボーレン市に位置する、ギーセンクレステルレ (Geißenklösterle) 洞窟からも多くの遺物が発見されていて興味深い。(図28) さらに近年の報告では約43,000年前～42,000年前という極めて古い数値が提出されていて、驚くべきである。ギーセンクレステルレからは4種類の遺物が発掘されていて、それぞれが極めて重大な発見である。¹¹⁾ まず、5つの象牙製の、孔の開いた小さな造形物はサイズがそれぞれ1cm程度で、報告者のコナードは、アクセサリーではないかと推察している。(図29) この時代に、どのような個人装飾があったかどうかは、類例がないので分からないが、紐状のものを通す孔が意図的に開けられていて、ペンダントトップのような用途が考えられるということだろう。それぞれ完形ではあるが、表面が摩滅していて、長期にわたって利用されたことを示唆しているだろう。

次いで、音楽の起源にも関わる重要な遺物として、「フルート」と解釈される作品が発見されている。(図30) 長さ12.7cmの白鳥の骨に、大きさの異なる孔が3カ所穿たれていて、複数の音程が出せる器具として、フルー



図28 ギーセンクレステルレ洞窟



図29 ギーセンクレステルレの「アクセサリー」5点



図30 ギーセンクレステルレの「フルート」



図31 ホーレ・フェルスの「フルート」



図32 ギーセンクレステルレの動物像1

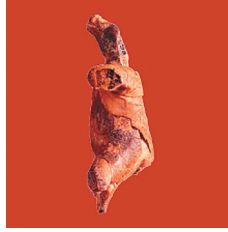


図33 ギーセンクレステルレの動物像2



図34 ギーセンクレステルレの動物像3

トというのは妥当な考えではないかと、思われる。ただし、もちろん、オーリニャック初期の音環境がどのようなものであったかは、全く分かっていない以上、過剰解釈のそしりは免れないだろう。ただ、造形的には、中心部に管が通っているトリの骨の特質を最大限に活用して、音が発生できるものを制作したのは間違いなく、今後、多方面から検討されるべき作例であるといえる。なお、ホーレ・フェルス洞窟からも3本のフルートが出土していることも、ここで付記しておきたい。同様に、ハゲワシの羽の骨を活用して楽器と解釈される作例が出ており、やはり、オーリニャック初期に何らかの音楽を演奏する伝統が培われていたと、推定するのが妥当かもしれない。

(図31) 4つの孔が開けられている長さ21.8cmの例もあり、様々な音を奏でていたのかもしれない、と想像を刺激する発見である。

美術作品としては、3点の動物像が見逃せない。(図32, 33, 34) 象牙製で、サイズは2cm~5cmで、四足動物ではあるが、どの種であるかは即断できない。フォーゲルヘルト洞窟の作品よりも年代が古いようで、進化的美術観からすると、細部表現が欠落しているなど、より前段階の作風である、という主張も可能かもしれないが、筆者は、そのような芸術観には立脚しておらず、この問題は、実証可能というよりは、各研究者の考え方に基づくところも多く、ギーセンクレステルレの動物像も、制作年代の差というよりは、作者グループの個性の表れではないかと、筆者は見なしている。

最後に、最もセンセーショナルな発見として、高さ3.8cmの軽く湾曲した象牙の板(1979年発掘)を精査したい。¹²⁾外側面には、5列の揃ったドットの連続があり、驚くべき事に、内側面には、手を挙げているとも見える正面観の人物像の浮き彫りが施されている。

(図35) 浮き彫りとは、刻むことを制作技法としているが、表現志向は平面造形であり、空間的には岩面画に類似するといえるだろう。いずれにせよ、両腕の表現は、限られた空間に収めようとする工夫であり、必ずしも手をあげているとは限らない。また、脇とも見える部分に左右に乳房を意図したとも見える部分があり、これは女性をあらわそうとしたとも考えられる。ドイツ語では Adorant (崇拜者) と命名されており、宗教性を示唆していて過剰解釈の嫌いがあるが、筆者としては、ヴィーナスと位置づけた方がいいのではないかと考えている。いずれにせよ、約43,000年前~42,000年前という極めて古い時代に、明らかに人物像と同定される平面的なかたちが見いだされるのは、筆者にとっては驚異の一言であり、なぜこのような造形表現が、オーリニャック初期のドナウ川上流域で制作されたのか、今後、深く考えてゆきたい事例である。



図35 ギーセンクレステルレの象牙板

5 クロマニヨン人の進出ルート

なぜ、ドナウ川上流地域なのか、という問題はホモ・サピエンスのヨーロッパ進出ルートだったから、というのが妥当なところだろう。ホモ・サピエンスそれ自体の起源もまだ謎のままであり、近代科学の限界を感じさせるが、そもそも、あらゆることがわかると考えること自体が現代人の傲慢のなせる技であり、謙虚にわかることだけをできるだけ正確に知りたいものである。

近年の傾向だが、ホモ・サピエンスの発生の年代も古くなってきており、200,000年前ともいわれているが、では、どこで、どのようにと問われても、何も答えられないのが正直なところである。

アフリカ大陸のどこかで出現して、そこにとどまっていたが、何らかの理由で約50,000年前に人口が爆発的に増えはじめ、新天地を求めて、アラビア半島に出ていった、といわれているが、実際のところは不明である。この現象を、脳内の神経系の変化のためという説が喧伝されていて、一定の支持を得ているようだが、筆者は、*fluidity*（流動性）という耳あたりのよい用語を持ち出されても、何も説明していないのではないかと否定的にとらえている。¹³⁾

メラーズが作成した図36によれば、発表された2004年のデータに基づいてはいるが、発見されていた遺跡の確かと思われる年代をつなげてみると、唯一の確固たるルートがドナウ川に沿っているのがわかる。¹⁴⁾アラビア半島から中東に至り、その後、現在とは海岸線が異なっているが、おおむね地中海の北側の沿岸を進むコースと、内陸コースに分かれたことになるのだろう。ホモ・サピエンスは、この現在は黒海に注いでいる、長大な川をさかのぼって、未知なる土地を目指したのかもしれない。ウルム市にもドナウ川は流れていて、上記4遺跡もドナウ川の支流に沿った場所にある。この地域に何か当時の人々を引きつけるものがあつたのか、はわからないが、現時点で、芸術の発生地点のひとつであることは間違いなく、今後、さらなる発見が望まれるところである。あるいは、他の地域やヨーロッパ以外でも見つかるかもしれず、それにより研究はさらに進展することだろう。

ショーヴェ洞窟のあるフランス南東部へは、地中海沿岸ルートを進んだ人々が到達したのだろうか。そうだとすると、南方コースは、後に洞窟壁画を創造し、北方コースは小彫像を創出した、ということになるが、実際はそれほど単純化できることではないだろう。まだまだ、現在の我々が得られている資料はきわめてわずかであり、ほとんどは長い歳月の中で消えてしまったかもしれないが、今後とも根気よく有意のデータを追求してゆかなければならない。

現時点で、ドナウ川上流地域で発見されている小彫像は「楽器」も含めると、約20点にも上り、すでに、ひとつの資料群を形成し始めているとは評価できるかもしれない。それゆえ、本稿でも、筆者は初めて立体的作品を議論の対象として取り上げている次第だが、数え方にもよるが、今や5,000作品以上とされる洞窟壁画に比べれば、ジャンルが違ふとはいえ、グラヴェット期以降の作品群を含めても、まだまだ希少であるといえ、手許にあつて、壊れたり、廃棄されたりして、残りにくかつたということだろうが、この数字のギャップをどう考えてゆくかも課題とはなるだろう。

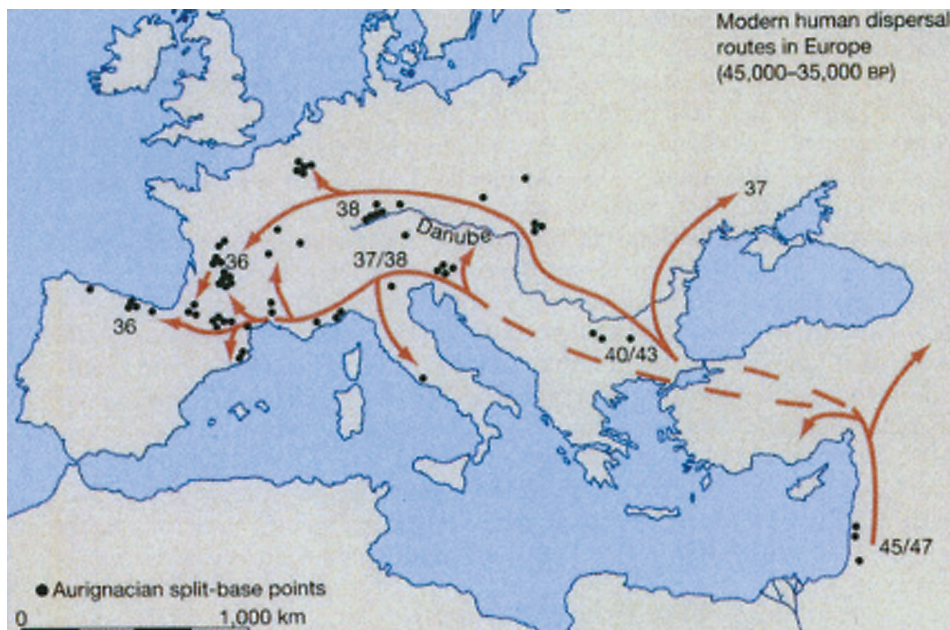


図36 クロマニヨン人の想定される進出ルート

おわりに

本稿を終えるにあたって、立体的作品と平面的作品の差異を、芸術学の観点から論じることにはしたい。絵画か彫刻か、という議論にも収斂されるかもしれないが、古代ギリシャ以来の大問題であり、ここで何かの結論を得ることは難しいだろう。一般的に言って、絵画は視覚的要素が強く、彫刻は視覚に加えて、触覚の作用も大きいだろう。レヴィ＝ストロースの「縮減模型」という概念によれば、美術作品は、現実世界の様々な要素から、多くの要素を減らすことで、より事物の本質をあらわにするものであるということであり、ここにはプラトンのイデア論のヴァリエーションであるという論評もある。¹⁵⁾たとえば、彫刻は、人体から体温などを減らすことで、より単純で制作しやすい模型となり、絵画の場合は、さらに3次元性まで減らして、より単純化された見取り図のようなものになるというのである。この考え方の当否は別にして、同じ美術作品でも、彫刻と絵画はかなり異なるものだという事は了解されるだろう。

オーリニャック初期には、ドナウ川上流地域では立体的な小彫像が制作され、フランス南東部のショーヴェ洞窟では、平面的な洞窟壁画が残された。異なったグループがそれぞれの表現を追求したということかもしれないが、まだまだ、ドナウ川上流地域の作品数が限定されているので、これ以上の議論はできない。重要なのは、洞窟壁画が、基本的に、あまり見ることも簡単ではない、洞窟の奥深い暗闇に制作されていて、また、制作された後は、改変されなかったことが特質としてあげられる。一方、ヴィーナス像などは、制作後も手許に所持されていたようで、表面が刻線や摩滅により改変されている。これは、使用目的にもよるだろうが、本来的に制作目的も異なっていた事を示しているのかもしれない。受容に関しても、洞窟壁画が、見られることがあったとして、作品から離れて観望的に対面されたのに対し、小彫像は、持ち運びできる動産美術であったことから、愛玩的、あるいは、呪術的解釈を援用するなら、呪物的なものとして受け止められたかもしれない。

とはいえ、オーリニャック初期に立体的であろうと、平面的であろうと、それまでホモ・サピエンスが行ってこなかった美術制作を始めたことには、やはり何か符合するものがあると考えざるを得ないだろう。筆者は、洞窟壁画に関しては、長らく「統合」説により、自然の岩面の凹凸が動物像などに見立てられて、それをなぞることにより成立した、と主張しているが、これはそのままヴィーナス像などには適用できないだろう。¹⁶⁾洞窟壁画が前提としている暗闇という条件が欠けているからだが、しかし、元の象牙やトリの骨が本来的に有していた形状が作者によって、女性などのかたちに見立てられ、最小限に削り取ったり、刻み込んだりして、作品が成立したという点で、ここにも「統合」説が当てはまるとはいえるだろう。ライオンマンにしても、垂直に立った姿勢なのは、上でも述べたとおり、もとの象牙の形状に制約されているためであり、直立しているから半人半獣像という解釈は当たらないだろう。

「統合」という原理が美術の起源に作用していることは、今回、ドナウ川上流地域の小彫像を検討することによっても、明らかにすることができた。今後は、上で述べた、立体的作品と平面的作品の表れが、どのような条件の違いにより成立したかということであり、制作者グループという人的な問題なのか、あるいは、洞窟の暗闇という地域的な特殊な条件が作用したのか、議論を深めてゆく予定である。小彫像は、後代のグラヴェット期には、フランス南西部などでも制作され、その伝統は広がっていったが、一方、洞窟壁画はドイツ方面には拡散することはなかったようである。これは現在の発見状況に基づく知見であり、今後の新発見により、大きく変わることもあるだろう。

「美術の起源論的アプローチ」を標榜している筆者としては、近年の、これまでの常識を逸脱した古い年代を、本稿で取り上げた作品の年代も含めて、追検証が不十分であるという観点から、まだ必ずしも受け入れていない。ショーヴェの年代に関しても、まだまだ疑義を呈する論文が発表されている状況であり、すべては今後の課題だといえるだろう。¹⁷⁾功を焦って拙速に陥らず、謙虚にデータに対峙して、最初の美術の姿を見据えてゆかなければならない。(了)

謝辞：

本研究は JSPS 科研費 JP25370105 の助成を受けたものです。

文献：

- Breuil, Henri *Quatre Cents Siècles d'art pariétal* Max Fourny 1952
- Chauvet, Jean-Marie et al. *La grotte Chauvet à Vallon Pont-d'Arc* Seuil 1995
- Clottes, Jean & Lewis-Williams, David *Les Chamanes de la Préhistoire : transe et magie dans les grottes ornées* Seuil 1996
- Colombier, Jean & Jouve, Guy Chauvet cave's art is not Aurignacian : a new examination of the archaeological evidence and dating procedures *Quartär* 59 2012 131-152
- Conard, Nicholas J. A female figurine from the basal Aurignacian of Hohle Fels Cave in southwestern Germany *Nature* Vol. 459 19 My 2009 248-252
- Conard, Nicholas J. & Kölbl, Stefanie *Die Venus vom Hohle Fels* Ungeschichtliches Museum Blaubeuren 2014 1-72
- Conard, Nicholas J. & Malina, Maria Abschließende Ausgrabungen im Geißenklösterle bei Blaubeuren, Alb-Donau-Kreis *Arch. Ausgr. Bad.-Württ. Theiss* Stuttgart 2001 17-21
- Conard, Nicholas J. & Malina, Maria Außergewöhnliche neue Funde aus den aurignacienzeitlichen Schichten vom Hohle Fels bei Schelklingen. *Archäologische Ausgrabungen in Baden-Württemberg* 22 July 2016 61-62
- Conard, Nicholas J. et al. Unexpectedly recent dates for human remains from Vogelherd *Nature* Vol. 430 8 July 2004 198
- Higham, Thomas et al. Testing models for the beginnings of the Aurignacian and the advent of figurative art and music : The radiocarbon chronology of Geißenklösterle *Journal of Human Evolution* 62(6) 2012 664-76
- Levi-Strauss, Claude *La pensée sauvage* Plon 1962
- Lewis-Williams, David *The Mind in the Cave* Thames and Hudson 2002
- Lewis-Williams, David & Dowson, Thomas *Images of Power* Southern Book Publishers (Johannesburg) 1989
- Mellars, Paul Neanderthals and the modern human colonization of Europe *Nature* Vol. 432 25 Nov 2004 461-465
- Merquior, José Guilherme *L'esthétique de Levi-Strauss* PUF 1977
- Mithen, Steven *The Prehistory of the mind : a search for the origins of art, religion and science* Thames and Hudson 1996
- Ogawa, Masaru Integration in Franco-Cantabrian Parietal Art : A Case Study of Font-de-Gaume Cave, France *Aesthetics of Rock Art* (eds. Heyd, Thomas & Clegg, John) Ashgate 2005 117-129
- Pettitt, Paul & Bahn, Paul G. Current problems in dating Palaeolithic cave art : Candamo and Chauvet *Antiquity* Vol. 77 Issue 295 March 2003 134-141
- Valladas, Hellene et al. Bilan des datations carbone 14 effectuées sur des charbons de bois de la grotte Chauvet *Bulletin de la Société Préhistorique Française* t. 102, no1, 2005 109-113
- Wehrberger, Kurt *Der Löwenmensch : Tier und Mensch in der Kunst der Eiszeit* Ulmer Museum 1994

注：

- 1) Conard 2009
Conard & Kölbl 2014
- 2) Conard op. cit. 250
- 3) Conard & Malina 2016 61
- 4) Conard op. cit. 250
- 5) Wehrberger 1994 29
- 6) Ibid. 30

- 7) http://www.loewenmensch.de/lion_man.html
- 8) Lewis-Williams & Dowson 1989 35
Clottes & Lewis-Williams 1996 92
- 9) Valladas et al 2005 109
- 10) Conard et al 2004 198
- 11) Higham et al. 2012 664
- 12) Ibid.
- 13) Mithen 1996 185
Lewis-Williams 2002 107
- 14) Mellars, Paul 2004 461
- 15) Levi-Strauss 1962 34
Merquior 1977 26
- 16) Ogawa 2005 117
- 17) Colombier, & Jouve 2012 131
Pettitt & Bahn 2003 134

図版出典

Breuil 22
Chauvet 24
Conard 4
Conard & Kölbl 3 5 7 8 9 10 11 31
Conard & Malina 12 13
Mellars 36
Wehrberger 6 20 21
筆者撮影 1 2 18 19 23
ブラウボイレン先史博物館ホームページ <https://www.urmu.de/> 14 15 16 17 25 26 27 28 29 30 32 33 34 35

Venus of Hohle Fels : Palaeolithic figurines from the Upper Danube Area, Germany

OGAWA Masaru

Approaching to the origin of art, the Venus from Hohle Fels Cave in German Swabia is the most important work to be dated about 36,000 years ago. How can we situate this 5.8cm high small figurine for all the history of art? In the same Upper Danube area, another examples have been excavated such as so-called Lion Man, animal figurines, musical instruments and a plate with human figure. These early Aurignacian 3 D artworks has been amounted to above 20 pieces, and we can compare them with the Parietal art from Chauvet, Southern France, estimated to be done also 36,000 years ago. What is the difference between Venus and animal paintings in the darkness? We continue to consider on the origin of art with 3 dimensional and 2 dimensional examples made by our earliest ancestors, Homo sapiens.